

# 見樹院ニュース

0

TE

RA

浄土宗 見樹院

住職 大河内秀人

〒112-0002

東京都文京区小石川3-4-14

TEL 03 (3812) 3711

FAX 03 (3815) 7951

Eメール: hit@juko-in.com

http://www.kenjuuin.com

第40号 仏暦2546年(2003・平成15年)1月1日発行

## 謹賀新年

住職 年頭所感

### 真実の声に耳を傾ける

昨年は不安と「憎悪」の年でした。テロ、凶悪犯罪、大量殺戮兵器開発、拉致問題。許し難い事件によって、憎悪の心を掻き立てられました。そしてそれはさらに大きな暴力を生みました。アフガニスタンやイラクでは、空爆による直接的な攻撃のみならず、生活基盤の破壊によって、多くの人が命を奪われ、今なお生存を脅かされています。

「キレル」とは、周囲との繋がりを切り、自己中心的な暴力に走ることです。他者と支え合い、生

かされていることを忘れ、歴史の中で学んできたことを忘れ、感情に支配され、対話と物事を素直に見ることを拒否し、他者を攻撃していく病状が、社会のいたるところで蔓延しています。

私たちは「憎しみ」にとらわれるがために、さらに大きな過ちを犯します。神でもないのに善と悪の単純な線引きをし、聞く耳を持たず、正確に見ることもせず、差別や偏見をもって、一方的な「正義」あるいは「被害者」の立場に立つことの暴力性に気づこうとしません。上の法句経のことばは、第二次大戦後のサンフランシスコ平和会議で、セイロン(現スリランカ)の代表が引用し、喝采を浴びた一節です。

な方向へ向かいます。好戦的なりダーやメディアの流す喧伝によって、勝手なイメージが作られ、憎悪がまったくいわれのない人々に向けられます。そして差別や偏見という、無自覚な暴力が、平和的な解決をさらに困難にします。怨みを持つことと、そこからこみ上げる怒りは、それ自体、私たちを苦しめます。そのとき、暴力というかたちで噴出することを、仏教に限らずキリスト教でもイスラム教でも戒めています。怨みや憎しみの心を鎮め、現実を正しく見て、自分自身で考え判断することを教えています。自分自身の暴力を抑えなければ、外にも内にもより大きな苦しみや不幸をもたらすからです。

攻撃の根底にある、差別や憎悪がどこから来るのか、その原因を合理的に辿っていくと、多くは自分自身の中にあることに気づきます。優越感を持ちたい、他者を支配したいという人間の悪しき性(さが)、それを短絡的に暴力で達成しようとする弱さを自覚して、冷静に周りを見渡すと、まったく違う真実が見えてきます。

『法句経』第九十七

日本に限らずほとんどの人々がもつ他の国や文化に関する知識は、メディアや政府によって与えられ

われらは怨(うら)み憎しみを憎しむ  
今う人々の中において  
怨みもなく、憎しみもなく、  
安らかに生きたい  
われらは怨み憎しみを抱く  
人々の中において  
怨みも憎しみもなくありたい

『法句経』第九十七

たものです。事件報道や映画に登場する―それはとても印象強く表現される―人々以外の、圧倒的多数の「普通の」アラブ人や北朝鮮国民と普通に接した人はどれほどいるでしょうか。

イスラムが暴力的であるというのは不当な偏見です。間違った教えで人々を暴力に駆り立てるグループの中にはあります。敢えて言えば、歴史において、否、現在

でも、キリスト教そして仏教の社会の方が、直接・間接に、よほど多くの人々を殺しています。

現在の状況に当てはめれば、正義や善を自認する「一般」の偏見と無関心が、独裁政権を支え、テロリストを生み出し、軍事産業を潤わせ、強大国に権力を集中させ、結局は私たちを含め、一人一人の命が脅かされていきます。

私たちは本当の苦しみと真剣に

対峙しなくてはなりません。勇ましい大宣伝ではなく、伝わりにくい、本当に悩み苦しんでいる人の声に耳を傾けなくてはなりません。

仏教も、キリスト教もイスラム教も、差別や偏見に苦しむ側から人間を見つめたところに始まりました。そして、押し潰されそうな小さな命の前で立ち止まり、声なき声の訴えを聞くことで、人間社会は高められてきたのです。

## ★極楽への祈り★

私たち浄土宗門下にとって、いちばんの祈りは、「南無阿彌陀仏」とお念仏を称えることです。その名前を呼べば、すべて極楽にすくい取ろうという、阿彌陀仏の誓願を信じて口にします。極楽浄土は常に大きな蓮の花が咲く爽やかな場所で、風が吹いて木々の葉や実が触れ合うとオーケストラのような音色が響き、鳥のさえずりは仏さまの教えを謳っています。人々はお互いを慈しみ合い、何の不安も感じることのないユートピアです。そこへ行けば、どんな罪深い者、愚かな者でも、覺りをひらき仏になることができます。しかしその極楽は、十億の世界を過ぎた西の彼方にあるといえます。限りなく絶望に近い距離です。しかし、あえてそれを飛び越える「信心」が絶望を希望に変えます。

本来、「仏を信じる」ということは、万物宇宙とつながるすべてのいのちは、皆仏になることができます。尊い存在なのだと思えることです。どんな極悪人でも、敵でも、いのちの本質は仏なんだと底抜けに

信じることです。

私はNGOのスタッフとして、東南アジアやアフリカの人々と接し、カンボジアやルワンダなど、隣人同士で殺しあった人々が、信頼を回復し、社会を再建していく取り組みを支援してきました。しかし現実には目の前で家族を殺され、辱められた怨みはとうてい拭い去ることはできません。孫の代でも赦すことはできないでしょう。しかも現実に利害や言い分もあります。それでも、「自分たちが何故対立し、殺し合ってしまったのだろうか」ということを真剣に考え、「共通の歴史」を問い直そうという、前向きな人々がいます。人間すべてがもつ根源的でないの祈り、「平和」という願いをお互いの中に認め合い、それが百年先だろうと千年先だろうと、必ずそこを目指すのだという決意の中に「南無阿彌陀仏」の精神を感じました。

釈尊誕生の言葉として伝わる「天上天下唯我独尊」は、人種、国籍、性別、年齢、能力、障害…にかかわらず、全ての人のいのちは尊いのだという宣言です。それが世界のルールになったのは、一九四

## 見樹院建築基金

### 寄付金中間報告

15,710,000円

(2002年12月31日現在)

ご協力ありがとうございます

#### ▼振込先口座

東京三菱銀行 春日町支店

普通預金 No.0963557

口座名 見樹院建築基金

八年の「世界人権宣言」です。たった五十年前のことです。何千年にもわたり、声も出せずに潰されてきた人々、筆舌に尽くしがたい苦しみを経験した人々の祈りが、世界をやっとここまで導いたのです。私たちの社会も少しずつ「理想」に向かっていきます。例えば人々が社会に参加する選挙が始まったのは明治になってから、それもはじめは身分の高い人税金を払っている人、男性だけといった制約が徐々になくなりまし。それでも強制連行を含め、何代も前から社会を担い、税金も払ってきた在日の人のことなど、もちろん課題は少なくありません。

だからこそ、「人間なんて醜いものだ」、「戦争のない世界などありえない」と諦めることなく、遙か彼方だとしても、平行線が交じり合う世界を信じ、排除や抹殺ではなく、いのちを尊重し信頼を築く先に、必ずみんなが願う世界があることを信じて、前向きに生きていかなければなりません。そして内なる世界から発する祈りが、世界を確実に変えていくことができるのです。

(カトリック淳心会『じじか』に寄稿)